



東方山安養寺

第33号
平成26年
8月31日



残暑御見舞 申し上げます

毎年必ずやって来る夏も、過ぎ去れば（今年の夏は例年になく災害が多かった等）、年を重ねるごとに何時も言ってきたような気がします。本当に今年は全国津々浦々に至るまで、大変な年を体験したような気が致してなりません。

思いを馳せれば当山でも、数年前からの自然災害発生に伴い、次から次に興る現実に対応する事にただあくせくしているのが現状でした。

改めて我々が自然界に対して、いかに無力であるのか！

さればこそ我々は自然界に活かされることを自覚し、敬虔な感謝の祈りの真を捧げなければなりません。改めて当山では皆様方によって、日々の勤行においてご本尊さまに対する心から熱いことを痛感する次第でございます。

されどまたご本尊さまを御守りする管理者として、その興りうる災害被害に對してただ手をこまねいてばかりはいられません。

この度も薬師堂大屋根修復事業に際しては、長期に渡り広く檀信徒の皆さんに御無理をお願いを申し上げますところ、早速下記に揚げさせて頂きました皆様から多大な御浄財を賜ることが出来ました。

誌面をお借りして謹んで御礼申し上げます。今後は、この秋に県へ資金調達の資料を提出し、了承され次第

真言宗
弘法大師88ヶ所霊場
東方山安養寺
520-3015
栗東市安養寺88
Tel 077-552-0082
Fax 077-552-9151
URL touhouzan-anyouji.com
E-mail to-anyouji@nifty.com

工事に入らせて頂きます。
合掌礼拝

追伸
県の補助金が借りられない場合は再度現場の応急処置を施して、先に当山の山門を入って右側に位置する防災用の溜池の整備を優先して取り掛かせて頂く予定に致しております。

敬具

平成二十六年度 修復管理基金 ご志納者一覧

- 全納（十口） 上村 寛
- （十口） 久木 伊勢雄
- （七口） 小島 頼信
- 十口 大山 和伸
- 高尾 屹
- 浅野 重雄
- 岡本 光代
- 石井 保
- 窪田 きくえ
- 小林 友子
- 金井 万平
- 瀬戸 重雄
- 高野 正実
- 四方 隆
- 川村 多恵子
- 杉本 茂

一口

- 吉廣 恵里子
- 吉津 政昌
- 藤井 勲
- 田口 光雄
- 山下 滋之
- 岩崎 皓二
- 酒井 清明
- 宇田 美佐子
- 有馬 哲
- 中川 智子
- 合田 俊英
- 長岡 保子
- 河田 雅光
- 鏡原 彰
- 佐藤 敬子
- 岩元 俊子
- 田中 祐二
- 一坪 徹夫
- 岩谷 鉄雄
- 中西 新次
- 今池 匡子
- 落田 亨
- 中村 佳代子
- 時岡 秀男
- 赤木 弘之
- 杉本 二郎
- 桑山 博史
- 安田 昭
- 後藤 千恵子
- 薦田 孝一
- 大村 勇
- 沖田 秀勝
- 紙崎 和子
- 衣川 俊成
- 坂口 善行
- 栗田 俊一郎
- 山口 久子

- 平田 恒美
- 丹羽 千代子
- 八木 悦代
- 有藤 一己
- 宮本 博
- 大野 直
- 湯浅 三郎
- 村上 イト
- 大西 正信
- 窪田 啓子
- 宮崎 藤子
- 中島 伸芳
- 鈴木 政人
- 野玉 幸
- 北村 貴子
- 細谷 卓爾
- 寺本 幸司
- 松本 幸雄
- 西脇 敏弘
- 山本 勝彦
- 畑中 治
- 川人 比佐夫
- 岩浅 憲資
- 吉長 幸夫
- 大杉 ふみ枝
- 越 哲男
- 森 藤人
- 松田 義勝
- 山上 高治
- 岩間 義明
- 利藤 方貞
- 石川 順蔵
- 原川 博善
- 坂元 貞徳
- 松下 英三郎
- 細川 忠夫
- 兵井 康久

守武 秀憲
 滝 敏彦
 塩飽 賢一郎
 金久 秀司
 岩井 宏之
 晶貴 正巳
 中平 進也
 桑山 由喜子
 田中 サダ子
 今林 正子
 米谷 訓
 福本 経子
 西川 富子
 高岡 茂光
 南 章
 大倉 省三
 藤原 宏
 長濱 吉章
 宇野 洋一
 正木 勇
 柏木 繁
 久保 繁
 勝部 利之
 宮野 節久
 中道 克司
 今泉 治武
 龜田 勝代
 田邊 夕子
 金澤 利美
 父川 慧始子
 加賀田 住江
 野口 美智子
 岡田 敏廣
 栗坂 只七
 豊田 克彦
 豊澤 怜子
 金子 舜次郎
 多田 昭雄
 浅野 利通
 堀内 芳春
 堂ノ尾 勇人
 小松 民子
 横山 英雄
 羽後 富美子

橋本 シゲ子
 尾上 美榮子
 永井 勝彦
 貝原 光敏
 山下 陽一
 矢代 眞佐博
 高田 充康
 村岡 良雄
 坂田 加代子
 西尾 純一
 千田 二三夫
 田中 勝
 佐藤 彰高
 青木 優
 福田 悦子
 味間 君代
 廣瀬 吉彦
 林 秀樹
 北森 芳雄
 本郷 みちる
 有友 喜久子
 後藤 博之
 土井 貞子
 向 晟光
 山田 俊行
 山本 謙二
 中本 陽子
 川北 陽子
 森 主助
 田上 隆生
 秦 一雄
 岡田 孝一
 久木 道夫
 丹下 篤則
 木寺 攸一郎
 山本 悦子
 山田 憲作
 小笠原 正敏
 中西 節子
 赤尾 喜久子
 平井 順廣
 父川 慧始子
 若林 宗一
 檜原 孝司

施餓鬼会祭文
 維れ平成二十六年今月今日東方山
 安養寺檀信徒の施餓鬼会を修行す。
 当山は天平十二年聖武天皇の発願
 により良弁僧正の開創にして、東
 方瑠璃山と号すなり。然らば、真
 言宗祖弘法大師が中興し承和元
 年堂宇を再建せり。
 弘長三年龜山天皇が伽藍を再興し、
 勅願寺となる。まさに安養の金刹
 遮那の報土なり。
 弘法大師の誓願は「濟世利民」に
 して、その法城として安養寺は今
 日に至る。爾來、法燈連綿として
 断絶せず。依つて莊嚴消躋してか
 えつて信敬の益をかき、是を以て
 護持信心の檀越を集めて堅固なり。
 本日ここに施餓鬼の壇を莊嚴し謹

八月二十五日現在
 193各家のご志納者です
 この基金志納金は今年から
 向こう7年間に渡り、毎年
 一口一万円以上のご志納を
 お願いするものです。

福家 義弘
 西村 弘幸
 中村 諭
 小谷 礼子
 松井 功
 木下 繁一
 永井 義隆
 米田 廣
 小濱 正行
 井家上 英樹
 田村 実
 松村 裕美子
 藤原 ひろみ
 原口 明
 田中 克和
 石田 敬一

しんで香花茶葉、百味百華の飾膳を備え
 て、有財無財一切之飢類に供(きょう)ず。
 伏して以みれば施餓鬼といつぱ、釈尊
 在世之砌、十大弟子の筆頭に於て、豊か
 な智慧者、その上神通力第一と称されし、
 目連尊者。その母が餓鬼道におち入り苦
 しむ母を救う故事から始まり今日まで脈々
 とその利益が伝えらるお盆、施餓鬼会の
 伝承なり。
 目連尊者の母、名を精提女といひし者、
 物を惜しみ、日照りに渴きをおぼえ、一
 杯の水を求めて戸口に立つ僧侶に対して
 水を与えず追い払う吝嗇家なり。さらに
 我が子を可愛いがるも、他人の子は邪見
 に扱ふ非業さで欲をむさぼり慳貪無際之
 業因に依つて死後餓鬼飢饉之苦果を受け
 地獄へと墮ちる。地獄は即ち小林之樹菓
 も万剣となつて身を切りきざみ、川河の
 水も、火焰となつて己の胸を焦す。この
 非母の苦患の悲し、苦しみを見て目連尊
 者は大声で啼泣泣きさけぶ。その姿はあ
 たかも嬰児の如し。目連尊者のはかりし
 れない人智を超える飛行之通力、神通力
 をもつても及び難く、悟聲徳道の
 感徳も叶ひ難し。
 これによつて釈迦如来の教を蒙つて
 種々の妙薬を儲け、二五の朝に坎ず。
 微妙の供具を九旬の夕に捧げて、自恣即
 ち真夏のインドにおける室内での修行に
 励む僧侶並びに一切の三宝に布施、供養
 を行つ。さすれば時を待たずして目連尊
 者の悲母・精提女は忽ちにして地獄鬼界
 の苦患から免れ、速かに微妙の快樂を得
 たまふ。目連尊者独り一世の厚恩の報ず
 るのみに非ず、亦流來生死の群類同かく
 一法性の直路に入り、ともに三菩提の覺
 位を証す。
 さればこの施餓鬼会の功力を受け一層の
 仏果を示したまうて円通を証されんこと
 を。 乃至法界 平等利益
 平成二十六年八月三日
 京都府向日市
 龜光庵住職 土口哲光 敬白

秋季彼岸会法要

- 一、日時
 九月二十三日(祭)
 午前十一時より
- 二、法要
 彼岸会法要
 ご先祖供養法要
- 三、法話
 龜光庵住職
 土口哲光僧正
- 四、奉納
 御詠歌
 大師流安養寺慈苑講
- 五、接待
 昼食 於 放光殿

